

♪エディットピアフ「アコーディオン弾き」その6(最終回)♪

ピアフの「アコーディオン弾き」には実に多くの録音がありますが、そのほとんどがライブで、戦後のシングル盤もパリのオランピア劇場での録音でした。それだけにピアフが1942年に創唱した唯一のスタジオ録音は貴重であり、ピアフの戦前最大のヒット曲で彼女の地位を確立した録音である点や、フランスのドイツ統合後、パリでは夜間外出もできなかった第2次世界大戦が進行のさなかに戦争の悲惨を真っ向から描いている点も注目されますが、アコーディオンのには、何とんでもギユス・ヴィズールが伴奏していることが見逃せません。

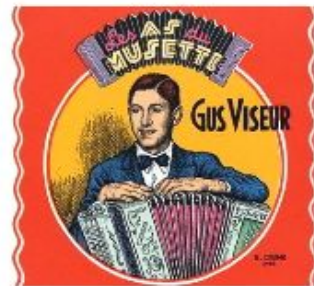
《マヌーシュ・スウィングを生んだギス・ヴィズール》

ギユス・ヴィズール(本名ギユスターヴ・ジョゼフ・ヴィズール)は1915年にベルギーで生まれ、ミュゼットやスウィングの名演奏家としてパリに出、若くから頭角を現したアコーディオニストです。1930年代にはジャズ・ギタリストのジャンゴ・ラインハルトがマヌーシュ(ジプシー、現代の表現ではロマ)・スウィングのスタイルを確立したフランス・ホット・クラブ・クインテットにも関わりました。フランス・アコーディオニスト界の巨人の一人であり、その名は名アコーディオ

ニストに贈られるギユス・ヴィズール賞に残っています。シャンソンの伴奏も多く、ピアフとも1940年代に数曲のレコーディングがあります。

また、第1次大戦の独軍の激しい砲撃から題名が採られた「モントーバンの火」をはじめ、「ジャネット」「秋」「甘い悦び」などの彼の曲は、アコーディオン愛好家なら必ず知っているアコーディオン必須のレパートリーであります。

近年、最盛期のSPが理想的な形で複製されてきました。ギユス・ヴィズールは1974年にパリで亡くなりました。(この項)



画像：アメリカの人気マンガ「フリッツ・ザ・キャット」の作者ロバート・クラムによるギユス・ヴィズールのベルギーでのライブ複製CD(2007, Paris Jazz, B000MRP2SG)のジャケットデザイン (筆者のコレクションより)

♪セルジュ・ゲンズブール「アコルデオ」♪

タイトルにアコーディオンを含むシャンソンは何曲もあります。しかし、そのものずばり「アコルデオ」なのはこの曲だけです。知名度も群を抜いています。ちなみにアコーディオン弾きを題名にした曲でも、ただ「アコーディオン弾き」なのはピアフの曲だけで、やはり早い者勝ちなのでしょう。

次回から才人ゲンズブールが1962年に作り、ジュリエット・グレコによって世に出たこの曲をみていきます。

インターネットの使える方にはYouTubeにグレコ (<http://jp.youtube.com/watch?v=JumcolWgoEs>) とゲンズブール (<http://jp.youtube.com/watch?v=gGSdWr4WhWl>)

の動画がありますので見ていただくと幸いです。

なんとと言っても言葉の魔術師ゲンズブールの作品ですから、話題は詞が中心になります。なにしろルフラン(繰り返し部分の「アコルデオ/アコルデオ/ドン/ロモナ/ラコルデオ/ラコルデオ」)だけでも、アコーディオンと連呼するかと思えば「さあ(ドン)お恵み下さい(アコルデオ)」と施しを求める口上であり、「施し(ロモヌ)は認められています(アラコルデオ)アコーディオン」とアコルデオという動詞を違う意味で使うので同じ響きが続き、アコルデオでしめくられています。リズムと音韻を整え、歌に重層的な意味を与える巧みな作詞法が強く感じられます。(以下次号)